

第二 1907年「癩予防二関スル件」

4) 『莠伶人吾妻雛形』

浄瑠璃。並木宗輔・並木丈輔作。1733年に大坂にて初演。

法会の稚児舞の役を巡る争いのために、俊徳丸はライバルから毒酒を飲まされて「癩」になる。陰陽師から、「癩」は神仏に祈っても効果がなく、人目の多いところで諸人に顔をさらせば、その悲惨さに毒を盛った者までも、憐憫の情を起し、快気することもあると告げられる。家臣仲光夫婦は反対するが、父親の「これそ誠の親の慈悲」との意向で、先祖の恥にならぬよう、家名を隠したうえで、天王寺に捨てられる。最後には、寅の年月日刻限に生まれた女性の生き血を飲めば「癩」は治るという「言い習わし」通り、初花という、寅年月日刻限生まれの娘の生き血を飲むことによって治癒する。

5) 『摂州合邦辻』

浄瑠璃。菅専助・若竹笛身弓作。1773年、大坂にて初演。

母に先立たれた俊徳丸は、美貌の継母・玉手御前から不義を持ちかけられるが、拒絶。それを逆恨みした玉手から、毒酒を飲まされて「癩」になる。以後もしつこく言い寄る玉手から逃れるためと、「癩」が家の恥となることを思っ、後生を願、自ら家を出て天王寺で乞食となる。天王寺で俊徳丸を追ってきた許嫁の浅香姫と再会し、ともに玉手の父・合邦の庵にかくまわれる。そこへ玉手が俊徳丸を追って訪ねてくるが、合邦の手によって刺される。虫の息の中で玉手は、実は次男の次郎丸が、跡目争いで俊徳丸の命をねらっていたので、俊徳丸を館から逃がすために、わざと恋を仕掛けたり「癩」にしたのだと告白。寅の年月日刻限に生まれた自分の生き血を飲ませ、俊徳丸の「癩」を治して死ぬ。

3. 各作品の分析

1) 謡曲『弱法師』

「癩」者の扶養

俊徳丸が父の館を追放されたのは、「癩」のせいではなく、讒言による。俊徳丸はその時点では、いまだ健康であり、天王寺へ行ってから悲しみのあまり失明したが（「思ひのあまりに盲目となりて候」）、「癩」だと明確には書かれていない。俊徳丸は不幸な境遇を、「あさましや、前世に誰をか厭ひけん」と、自分の前世の行いの報いだと考えている。父は天王寺の施行の場で、乞食に身を落とした息子を見つけたが、人前で親子の名乗りをあげるのを恥じ、夜、人目を避けて館へ連れ帰る（「人目もさすがに候へば、夜に入りてそれがしと名のり、高安へ連れて帰らばや」）。ここでは父親は、乞食をしているのが我が子であることを人に知られるのを恥じてはいるが、病身の子を家へ連れ帰って養育するのは当然と考えている。

2) 説経節『しんとく丸』

貴族の「穢れ」意識

京都の貴族出身の継母が、夫のぶよしに向かって、しんとく丸を追い出すよう強く迫ったために、